

的仲裁條約締結の意圖を有するものなりとするならば、之は滿洲國や南洋諸島の運命を第三者の手中に委任するものであつて、其放棄と同様である。若しかゝる死活問題を仲裁條約の範圍から除外して、單に小問題解決の爲めに過ぎぬならば、之れは戦争の動機とは没交渉であつて、其の防止には何等の役目をなさず、従つて戦争の危険に對し海軍力充實の必要は之が爲め毫も軽減し得ないではないか。故に軍備充實を伴はぬ外交工作は無意義であり、不可能でもある。我に十分の備へありて、始めて彼をして我主張を容るゝも尙且つ戦争の危険を避くるの賢明なるを悟らしめ得るであらう。即ち滿洲國の獨立も默認するであらうし、南洋諸島の返還も強硬には主張し得ないであらう。従つて又米國との戦争を豫防し平和を維持することが、茲に始めて可能にならう。

對露戦備を度外視して不侵略條約を締結することも等しく無意義であつて、第一吾人は共產政府が國際條約を遵守するの誠意ありや否やを問はざるを得ない。彼の帝政時代の債務否認及外蒙新疆の侵略、其他過去幾多の事例に徴し、赤露との不侵略條約は到底確實な平和の保障とはなり得ないのである。我軍備が現状の如く彼に對し抑しき遜色あれば、彼は其欲する時機に於て滿洲を侵し、支那を脅かすであらう。假りに武方を以て侵略を行はずとも少くも、滿洲の赤化を強行するの可能性は極めて大である。此場合帝國は却つて不侵略條約に妨げられて彼を膺懲する能はず、又之に要する武力を持たぬであらう。故に對露關係調整の爲め不侵略條約締結の如きは第二義的であり、最も有効の方策は何時にても戦ひ得べき嚴然たる軍備の充實であらねばならぬ。

### 結 論

要するに陸海軍備の充實は來るべき國難打開の爲め、最要且つ最良の關鍵であつて、之れあつて始めて米露支等の戒慎を促し、平和維持の外交的工作も成功の望みを生すべく、萬一彼等にして不當の攻撃を敢てする場合に於ても、確信を以て能く之に對抗し得るのである。外交的工作固より必要なり、然れども其前提は常に所要の軍備を充實するにある。之れが爲め財政上の負擔は莫大であるけれども、此際此支出を惜しむに従ひ戦争の可能性は益々増大し、將來之に數倍すべき戦費の支出を餘儀なくされるを思はねばならぬ。軍備は平和の保険料なりとは至言であり、切に五相會議の猛省を促す所以である。

若し此會議に於て軍部當局の正論が蔽、外相の謬論に屈服するが如きあらば、吾人は敢然として政府の非違を糾弾せねばならぬ。固より軍事、外交、財政が三位一體となつて國際政局に善處すべきは勿論であるが、時と場合に応じて其輕重を考慮し、其緩急を計るは爲政治家の經驗に屬する所である。今の時に方つて増税を遂巡し、行財政を不問に附し、徒に歳出の膨脹を惧れて一年半の後に急迫せる國難に備ふる唯一無二の國防を閉却する大蔵大臣あらんか、或は又外交的術策を以て此の國難を回避し得べしと信じ、軍事費の削減に贅意を表するの外務大臣あらんか、又之が裁斷に方つて徒らに内閣の倒壊を虞れ、或は軍大の責任を回避せんとして國家百年の大計を誤るの總理大臣あらんか、吾人は鼓を鳴らして其の非違と無經驗を糾弾せざるを得ない。今や我國民の最大多數は内田前外相の焦土外交の聲明なくとも、之れと同一決意を以て軍備の充實を希望して止まない。此時に方り二